有識者ヒアリング議事録①

1. 有識者名	嶋田学氏（奈良大学 文学部 文化財学科 教授）
2. 日時	令和 2 年 6 月 23 日（火）13:15～14:45
3. 場所	奈良大学
4. 配付資料	1. （仮称）中央図書館基本構想について 2. 中央館構想骨子案 3. 市立図書館の概況と構想策定について 4. 主なヒアリング事項について 5. （仮称）中央館図書館基本構想の構成案 6. 豊中市立図書館に関するアンケート調査報告書【概要版】 7. 豊中市の図書館活動　平成 30 年度（2018 年度）版

5. 内容

0. 前提の確認等

・ 第 4 次豊中市総合計画・実施計画の内容も確認したが、基本構想の策定時期を次年度以降に延ばすわけにはいかないか。「豊中市立図書館の中長期計画（豊中市立図書館グランドデザイン）」で中央図書館整備に一切触れていないにも関わらず中央図書館基本構想を策定することに関して、政策として唐突と感じてしまう。理想を言えば、グランドデザインを先行して更新するとともに中央図書館整備の必要性を盛り込み、それに基づき政策的に図書館全体をスマートにするという流れとするのが望ましいのではないか。また、これらを方法論的に進めてしまうと財政面の見直しという大きな目的が明確とならないため、今後改善していけると良い。岡町図書館は築 50 年であることから、大きな視点・ストーリーに基づく 50 年先に向けた豊中市立図書館及びそのサービスのあるべき姿を掲げ、そのうえで中央図書館整備やネットワークづくり・再編を検討することが政策的には望ましいと感じた。グランドデザインと中央図書館整備との関連性が気になっている。基本構想とグランドデザインの整合を図るという面ではもう 1 年程度時間が必要と考えた。

1. 公共図書館施策の動向について

① これからの図書館サービスのあり方

・ 近年では AI に関する多くの本が出版されており、今後さらに開発が進んだ場合に一部の業種で既存の仕事が AI にとって代わられる可能性があるとされている。しかし、AI の研究者によると司書は AI による肩代わりが難しいとされている。AI 研究者によれば、情報処理・活用が進めばある種の仕事はなくなるだろうが、こうした時代にこそ人間の生活時間、幸福実現のための生活が重要となるという。その価値がこれまでは真剣に追求されて来なかったのではないか。経済活動はもちろん必要だが、分担が曖昧になってきている政府と市場の役割を今こそ明確に分けるべきである。**図書館のように全方位に向けた市の情報提供を手段とする事業は、幸福の追求や生活の充実をその真の目標・使命として掲げていく**のが良いだろう。計画文書の作成にあたっては、その内容を深堀していくとどうしても手段に関する記述に目が行きがちなため、私自身は**各章でその使命への還元を意識させること**に注意すべきと考えている。基本構想の中でもそうした大きなストーリーを描くことが重要となる。例えば、グラ

ンドデザインの3ページにある基本目標1「図書館活動全般を通じて、教育と文化の向上に貢献し、人権を尊重するまちづくりをめざします」も言葉としては良いが、曖昧である。**動かしがたい具体的な目標**が示せないだろうか。他にも基本目標の4、5、6、7、10、12、14等はどっしりとしたテーマとなっている。初めて豊中市で中央図書館を整備するにあたり、より明確な構想策定の趣旨を打ち出すと良いだろう。

・ アフターコロナの状況下、社会や価値観が変わる節目であると多くの人が感じている。今までと同じ文脈で基本構想を策定するのではなく、地に足がついたストーリーとなっていると感じられるような内容にすると良いのではないか。きちんと文書として柱立てしていくと、それに職員も意識づけられていく。

・ 豊中市は成熟した都市であるため、総合計画等も誰も文句のつけようのない無難な内容になりがちである。私自身は以前に人口4万人程度の自治体の図書館に勤めていたことがあるが、最近では人口1万数千人の町で図書館整備に取り組んでおり、個性的な首長もいて、町独自の図書館整備の方向性が非常に分かりやすい。バランスの取れた良いまちを作っていくというのも間違いではないが、何か**豊中市らしさ、周辺自治体から頭1つ抜け出るような部分があると良い**のではないか。

・ アンケートからは、既存の利用者ほど現状維持を望んでおり、そうでない回答者は新しいことを望んでいる傾向が見られた。

・ これから**AIにできる仕事が広がっていく中で、人間が本来すべき物事に集中できるチャンス**であるにも関わらず、**そこを生きる思想や哲学、価値評価**がなければ、人は生きる目的を失ってしまう。我々が不安の中でいかに生きるべきか、図書館がそこに寄り添って市民の未来展望を手伝っていくことを基本構想の中で示せないか。「未来創造都市」としては、都市の未来だけでなく、人間の未来の生き方を見据えていく必要がある。文章にせずとも職員がそういったバックボーンや思想を持っていないと、社会変革の真っ只中にいる市民に対して本当の意味での情報支援はできない。**図書館は時代の0.5歩先を行くと良い**。かつて八日市市立図書館の館長をされていた西田博志氏が「図書館はどちらかと言うと時代の後ろをついていくべきだ」と言ったが、それだけでは足りない。80年代に、株や土地の投機ブームがあり、多数出版される関連図書を図書館が無批判に数多く購入し提供してしまった経験などを踏まえると、時代の潮流にそのまま乗るのではなく、その先の状況を客観的に見据えることが必要と感じる。後ろをついていくというのはそういった意味合いだろう。その一方で、**おそるおそる先を見ること**も必要だ。「こうした本があるようですが、皆さんどのように思われますか。」といった情報提供の方法もあり得るだろう。

② ICT化・電子的コンテンツ

・ 映画『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』で800万人のニューユーク市民のうち3分の1もしくは4分の1にWiFi環境がないと聞いて驚いたが、今回のコロナのことで、実は現在の日本でも、PC・インターネット環境のない世帯が2割程度存在することが分かったという。そのような状況下で、大学でも遠隔授業が受けられない学生が出てきている。これまで図書館は本という資源を用いて活動を展開してきたが、例えば無償でWiFiを貸し出すな

ど、情報アクセスを保障することに資源を分配することも考えなくてはいけない。瀬戸内市[i]では、iPad を 10 台館内貸出しており、PC やタブレット端末を持参した子どもと館内で iPad を借りた子どもが肩を並べ、ゲームをしたり映像を見たりしていた。子どもでも端末を持っていないために一緒にいることができない、つながることができない状況が生まれている。図書館が対応すべきか他の機関等が対応すべきかという議論はあるだろうが、一義的には**情報へのアクセス権の保障**として図書館が対応すべきであろう。

③ 広域連携

・ 隣の箕面市で今話題となっているが、大阪大学を指定管理者とする事例が存在する。広域連携に関しては、官学連携も選択肢となり得るだろう。奈良大学でも協定を結んでいる町村との連携事業を模索しているところで、図書館未設置自治体に設置のノウハウ提供を行う等のアプローチをしている。大学に寄付講座を開いてもらうというのは安易な発想かもしれないが、地域住民への生涯学習プログラムの提供の面等で連携はできないか。岡山県の瀬戸内市民図書館では、放送大学と連携し、出前講座を開催するにあたって、放送大学のテキストを全点揃えている。放送大学は在学しなくても BS 放送で視聴できるため、テキストを見て学習内容を補足したい場合には図書館で借りられるようになっている。安直ではあるが、そういった連携もあり得るのではないか。**放送大学のテキスト購入**には学部科目全点で 150 万円程度かかるが、新版などの更新は年間 15 万円程度、大学院科目まで入れても 20 万円程度で可能である。豊中市民にとっては大きな投資を伴わずにインパクトのある連携を生むことになるのではないか。また、各分野の先端の先生方がテキストを執筆されており、テキスト自体の評価も高い。

④ 広報・情報発信

・ 選書で資料に幅や深みを持たせるだけでなく、その良さを発信するプログラムもあると良い。**web 上のセミナー**でも良いし、HP 等を閲覧した際にさすが豊中市立図書館と思われるような内容とすると良い。司書が本の著者や構成、見どころなどをごく簡単に紹介するプログラムがたくさんあっても良い。見せ方は zoom のレコーディングで、司書の講話と PowerPoint によるプレゼン画面の共有というスタイルであればそれほど労力も要しない。正規職員も多い豊中市立図書館の底力を発信していくべきである。そうしたことが得意な職員もいるだろう。職員一人ひとりのポテンシャルを活かして動機付けをしっかりとし、個別の満足感を生み出していくことも必要となる。

・ レファレンスは職員にとっては日常業務だろうが、質問の記録を残すことは、利用者が「こういったことを聞いてもいいんだ」と思うきっかけになる。

⑤ アウトリーチ

・ これは公民館の役割だと言う人もいるが、出張 ICT セミナーの事例も見られる。米国のイーノック・プラット公共図書館では、移動図書館車に 12 台の PC を積み、地域に出かけていって出張 IT 教室を開催したりしている。特に今回コロナ下において、遠隔でのコミュニケーションが拡大しており、オフィスを解約して基本的にリモートワークとするような企業等も出てきている。地域で暮らす高齢者も含めて、非接触・非来館という観点で考えると、リテラシーの向上が課題となる。そうした目的のために移動図書館車で機器を運ぶこともアウトリー

チサービスとして考えられるだろう。

⑥ 市民協働

・ アウトリーチサービスとも関連するが、web 上での繋がり方やアクティビティも想定しておく必要がある。例えば、現在新図書館を準備中の富谷市の図書館[ii]では、開館準備期間中でも取り組むことのできるサービスとして web 上の読書会を開催している。今後はこうした取り組みの検討も必要である。

・ 市民協働でどのような事業を行うか以前に、市民とつながるベースをどのように作るかも重要となる。私がこれまで勤務してきた自治体と豊中市とでは状況が異なる。大きな都市で言うと、横浜市の都筑区[iii]では、図友連（図書館友の会全国連絡会）事務局長の福富氏が有名だが、既に地域にあるつながりを活かした市民協働が進められている。豊中市では、どういった市民協働を目指されるのか、どのように市民へ声掛けしていくのか。既存のボランティアの高齢化も進んでいるだろうし、その他の市民からはある種の既得権益として見られている可能性もある。図書館が良い活動をしていることがそれらの人たちのシビックプライド醸成につながっている部分もあるだろうが、**今後はまちの新しいブランドイメージを思い浮かべている人たちとどのようにつながっていくのか**も重要となる。

・ アンケート調査結果を見てさすが豊中市だと思ったのは、市民で 1 か月の読書量がほとんどないという人が 4 割を切っており、また本を読む人の中には図書館で借りる人が 51%もいる点である。今後に向け、実利用率も把握できると良い。

・ 職員のコーディネート力向上に関しては、ファシリテーター養成研修を検討されてはどうか。今後市民ワークショップを開催されるということもあるため、例えば論点整理といった技術であれば、ホワイトボードミーティングで有名な松原市在住のちょんせいこ氏等から学ばれると有効かと思われる。講師料はやや高額だが非常に質の高いプログラムとなっており、物の見方や整理の仕方を学ぶことができる。ホワイトボードミーティングも 1 つの技術にあたることから、研修プログラムに組み込んではどうか。私自身も東近江市に勤めていた際に取り組んだが、日常的な会議でもホワイトボードを使うようにすると職員全員の意見を引き出すことが出来、会議の質が上がる。テーマにもよるが、交換される意見の言葉を書き留めないと議論の方向性が可視化できない。ホワイトボードを使うことで、すぐに決まることと時間を要することも整理しながら進めることができる。

⑦ 基金創設

・ 私も館長をしていた時代に、年間 20 万円程度の基金ではあったが、条例を作った。ふるさと納税なども含めて、寄付意図が明確な場合に、その受け皿として基金条例があることは有効。

・ 『情報の科学と技術』（情報科学技術協会）の最新号に、豊田恭子氏の「米国の公共図書館界で広がる図書館財団の活動～資金調達からアドボカシーまで～」という論文[iv]が載っている。ただちに日本で実践できるものではないが、日本の場合にはどのような法律に基づき、どのような枠組みで財団を設立するべきか、等が書かれている。自治体の財政とは別の予算を持った財団を立ち上げ、そこからの寄付行為により図書館を運営するということである。日本は米国と比べて寄付文化が弱く税制も異なる部分があるが、**ふるさと納税**という有利な寄付ルール

もできてきたので、それも１つのありようかとは思う。

・ これからの挑戦ではあるが、確かに財政民主主義のみで進めていくというのは厳しいだろう。色々な難しい状況があって国民間で格差は生じているものの、国民が所持しているお金の存在は大きい。国内の見えざる資源を有効に使うという意味では、**クラウドファンディング**等も有効だろう。瀬戸内市では、寄付で８億円を集めて５億円の国宝の刀を購入した。きちんとしたストーリーを組み立て、粘り強く対応すれば資金が集まることを示した事例といえる。豊中市と同規模の米国のボルチモア群の図書館では、図書館費のうち6%程度を民間からの資金調達によって賄っているという。豊中市のような文化性を考えると、何らかの可能性があるだろう。**資金が不足しているから負担してほしいではなく、図書館として新たな価値を生み出すことに協力してほしい**などと説明できると可能性があるのではないか。

2. 施設再編の方向性について

① 階層的な機能配置の留意点

・ **従前のサービスはなるべく省力化されてはどうか。**自動貸出機の導入等は徹底されているとは思うが、一人ひとりの職員のパフォーマンスも上げる必要がある。今**後はアクティビティ系が重要**となる。生涯学習と言うと焦点がぼやけるので、**成人教育（アダルトエデュケーション）**という表現で良いと思うが、自分を高めたいという潜在的な欲求へのサービスに特化する等、シンボライズされた図書館政策が必要である。これからの高齢者は、健康寿命を意識して生活習慣に気を配る人、あるいは高学歴な方が増えてくる。いわゆる**アクティブシニアの中で眠っている知恵・能力などの資源を自己実現・地域貢献としてどのように活かしていくか**も考える必要がある。現在の社会教育は、地域の教育力を学校教育に活かすというスタンスであるが、肝心の地域の大人が学べる社会教育プログラムは後退していると言っていい。成人してからこそ、本当に学ばなければならないという現実にどう対応していくかが問われるだろう。

3. 蔵書方針について

① 全般

・ アンケートでは実用書へのニーズも見られ、蔵書の幅や深みも求めていると感じた。成人教育という観点では、極端な言い方だが文芸系の複本等は削り、資料に幅、深みを持たせていっても良いのではないか。

・ 豊中市は北摂地区の中でも蔵書が多い方と思っていた。近隣他市に比べると蔵書が少ないと言われる背景には、服部・蛍池図書館と新しく施設を整備していく際に資料費がうまくつかなかったことがあるだろう。ニーズの高い資料はそれなりに所蔵しており貸出密度は高いものの、市民から本当に望まれている蔵書構成となっているか、これを機に見直す必要があるのではないか。

② 分担収集

・ 自治体を超えた分担収集の事例としては、長野県塩尻市で松本市を意識した資料収集をしている事例がある。両市では通勤での行き来が盛んであり、図書館も相互に利用できるようになっている。

③ 電子書籍の活用

・ 電子図書館で提供可能なタイトルがもっと増えるべきである。今回のコロナ禍では来館者名簿の作成が大きく話題となったが、閉館要請によって資料提供の自由も大きく後退し、市民の利用が大きく制限されたことの問題が大きい。私自身も反省しているが、これまでの図書館は電子書籍に対して、「十分なコストパフォーマンスが確保できるのであればぜひ導入したい」という一歩引いた立場であった。コンテンツを提供する責任は、出版という、産業でありながら文化的側面が強い業界が担っている。図書館としてそれを支えていくのであれば、どういった方法であれば出版界が少なくとも現状の経済規模を維持しながら図書館に対して電子資料を提供していけるかを一緒に考えていかなければならない。国も公貸権についてきちんと議論しなければいけない。紙の本の状況で言うと、公貸権を導入している国ほど日本の図書館の利用は盛んではないため、実際には逸失利益に大きな影響は与えないだろう。ただし、電子書籍となると借りることが容易になりもっと利用が進むだろう。その場合に版元や著者の利益をどのように確保しながら図書館で利用可能とするかという問題がある。大きな話となってしまうが、活用という前に、いかに市場を作るかを考える必要がある。電子書籍の提供事業者から話を聞いたことや報道を見たこともあるが、コンテンツ数が爆発的に増えることはない中で、状況をどのように打開していくかが課題となる。

4. （仮称）中央図書館の機能イメージや事業手法について

① 公共空間の創造方法

・ 当然機能融合ということもあり得るだろう。整備候補地にもよるが他の老朽化した施設との複合化もあり得るだろう。整備後に他施設と複合化しておけば良かったというのでは手遅れとなる。

・ 最近は日本でもメイカースペースを設けるようになってきた。情報を提供するだけでなく、ものづくりを通じて特に子どもと青少年の発想力・想像力を高めようとしている。マナビノタネの森田秀之氏が関与している**宮崎県都城市**の新しい図書館[v]ではワークスペースを設け、ミシンがあったり染物ができたりと、ファッション系の設備も充実した内容となっている。また、そこをコーディネートする専門家としてファッションデザイナーも非常勤的に関わっている。小さな図書館でも 3D プリンタやレーザーカッターを使えるスペースを備える事例が増えている。最近でいうと**福島県の須賀川市の tette**[vi]でもチャレンジングな取組みが見られて面白い。**島根県の西ノ島町**は人口 2,800 人のまちだが、1,000 ㎡程度で、移住者を含む町民がものづくりに使える共用のスペースを整備[vii]している。現在関わっている**高知県の佐川町**にはものづくりのためのラボがあるため、図書館との融合も検討している。アメリカや北欧でも同様の取組みが盛んで、フィンランドに新しく整備された中央図書館などでも充実した

設備が見られる。

・ 東京都の**武蔵野プレイス**[viii]の地下の空間が規模は大きいものの参考になるのではないか。**長野県の塩尻えんぱーく**[ix]のような展開も豊中市であれば検討できるのではないか。複合化すれば良いというものでもないが、図書館単独で整備するというのもどうなのかと感じる。

5. 評価指標について

① これからの図書館評価を行う上での留意点

・ 豊中市は、図書館評価の実践面でも先頭を走っている。「豊中市の図書館活動」にある評価基準の設定当時は、公共図書館がいわば評価流行りの時代にあった。ただ、測ることが政策の向上・改善にどれだけの効果を持つのかという点については、疑いの目を持たれている部分もある。計量化することで効果が上がる部分と、そうではない部分とが存在する。当初から同様の指摘をする声はあったが、近年では『測りすぎ』ジェリー・Z・ミュラー著（みすず書房）という本も出版されたように、測ることと政策の向上・改善とが必ずしも直結しないことが明らかになってきている。多くのエネルギーを要するなど、評価すること自体のデメリットもある。豊中市では評価が緻密に実施されている一方で、**何のために評価を行うのかという視点**が後退していないか点検する必要があるかもしれない。目標も掲げられているものの、手段が目的化している印象を受けてしまう。評価についても、これからの図書館のあり方を大きな文脈として捉えたうえで実施していくと良いのではないか。

・ 直営ではない選択をする図書館も出てくる中で、豊中市がそうではない選択をする場合には、基本構想などで市民に納得してもらうための材料を示す必要がある。人口 40 万人で 1 人当り貸出冊数 8.8 冊と、貸出率や蔵書回転率は高い。これらの**アウトプットだけ見ると頑張っていると思われるが、そこからどういったアウトカムが出てくるかを語れるようにならなければならない。**これらアウトプットの中で、**豊中市民はどのような自己実現や生活の安定、幸せを得られるのか語れる必要**がある。個人的には、全体的な評価というよりはこれらの物語が生まれることを重視している。これまではあまり重視されてこなかった評価の視点である。理論的にはトラベルコスト法等の評価手法もあるが、結局は来館者・市民アンケート等で図書館がどのように見られているかを評価されがちである。思い切って、**市民に対してどのような価値を提供できているかを示す方向**を模索してはどうか。小さなまちでこれから図書館を整備しようという場合には、どういった楽しいことができて、どういった充実した時間を過ごすことができるかという住民一人ひとりのストーリー、未来像を描こうとしている。職員一人ひとりがこうした面にきちんと向き合っているかも問われることとなる。新しい中央図書館を整備する際には、老朽化したから新しくする、財政的に厳しいからコストを抑えた効率的な施設を整備するという説明で納得する市民もいるだろうが、サイレントマジョリティが期待しているのは、**自分たちの住むまちに図書館があることで得られる良さやささやかな幸福を思い描くことのできる新しい図書館像の提示**だろう。中央図書館を整備するだけでなく、ある種豊中市立図書館が生まれ変わる機会とも言える。財政的に厳しい中でこのままの姿であり続けるわけにはいかないことから、既存利用者のニーズには一定程度応えつつ、

「あれかこれか」という対応も必要となる。その一方で、「あれもこれも」という考え方でないとこれからの時代は難しい部分もある。既存の資源で対応しようとすると「あれかこれか」となってしまう。

- **市民 1 人あたりコスト 2,500 円は決して高くない。日本全体が低すぎる。**

6. その他

- （仮称）とはついているものの、中央図書館として名乗るのが良いのかどうかはわからない。他の名称もあるかもしれない。いずれにせよ豊中市として新しい価値、あるいは重視することが伝わる基本構想になると良い。具体的な部分は詰めきれずとも、これからどういった価値を目指していくのか、職員間の議論や市民ワークショップ等で挙げられる意見等も踏まえて、地に足のついた内容となると良い。
- 豊中市には、「これぞ豊中」という点が無いのがある意味強みでもある。阪急宝塚線が街の中央を縦断し、今や大阪市のベッドタウンという属性は薄れ、大阪府北部の文教都市として北摂エリアの中でも際立っているといえよう。**ワークショップの際は、豊中市の良いところ等も含めてブレインストーミングをしてみてはどうか。**

以上

参考

---

[i] **瀬戸内市民図書館（岡山県）** https://lib.city.setouchi.lg.jp/

[ii] **富谷市立図書館（宮城県）**
https://www.tomiya-city.miyagi.jp/site/public-library/

[iii] **「困難な時代に主権者である市民は何をすべきか、何ができるか」**
図書館友の会全国連絡会　福富洋一郎氏 「図書館界 2017 年 68 巻 6 号」（日本図書館研究会）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/toshokankai/68/6/68_362/_pdf/-char/ja

[iv] **「米国の公共図書館界で広がる図書館財団の活動～資金調達からアドボカシーまで～」事例報告　豊田 恭子氏 「情報の科学と技術 70 巻 6 号（2020）」（ 一般社団法人 情報科学技術協会）**
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jkg/70/6/70_323/_pdf

[v] **都城市立図書館　マルマーケット（宮崎県）** http://mallmall.info/library_mallmarket.html

[vi] **須賀川市民交流センター（福島県）** https://s-tette.jp/

[vii] **西ノ島町地域おこし協力隊（島根県隠岐）**
http://www.town.nishinoshima.shimane.jp/teiju/chiikiokoshi/

[viii] **武蔵野プレイス** https://www.musashino.or.jp/place/

[ix] **塩尻市市民交流センター　えんぱーく（長野県）** http://enpark.info/